

◆障害学生の修学支援◆

第八回 心の問題への対応

筑波技術短期大学助教 石田久之

障害学生の修学支援を四つの研究領域に分け、授業保障と設備等の評価についてみてきましたが、本号では三番目の心の問題への対応を考えてみます。

障害の受容

「障害の受容」という言葉があります。自分の障害を見つめ、理解し、受け入れるということですが、その上で、(学生)生活を築いていくわけですが、実際には簡単なことではありません。パニックに陥ったり、希望をなくしたりすることもあります。障害を受け入れること自体を拒否することもあります。このように、障害学生特有の心理と周囲との関わりの問題です。

ある大学の保健センターの看護師さんが、障害学生にどんな支援が必要かと尋ねたところ、自分は障害者ではないと言われ、保護者からも自分の子は障害を持っていないと激しく否定され、とても悪いことをしたと気になさっていました。

前述のように受容ができていない場合、当然、支援も受け付

けません。では、受容ができれば支援を希望するかということでもありません。なるべく周囲に知られないように「防衛的な」行動をとることがあります。自ら支援を要請するというのは、簡単なことではありません。

また、普通高校に在籍していた難聴や弱視の学生の場合、聞こえにくかったり、見えにくかったりしても、それを周囲に言うことを控える場合があります。隠すということではありません。高校段階まではなんとかついていけたからです。しかし、大学のような高度な専門教育の場では、そうはいきません。自分でも理由がよく分からないままに授業についていけないなり、単位を落とすということもあるようです。

アイデンティティの形成

では、研究の一例を挙げましょう。聴覚障害学生には、支援や研究を行う健聴者との間にコミュニケーションの壁があり、また、情報保障を「受けざるを得ない」という心理的葛藤もあるといわれています。「聴覚障害に伴う限界や不自由さを極端に嫌だ」と思い、自分から聴覚障害者を差別していた」という聴覚障害学生自身の苦悩を報告する研究もあります。単に聞こえないということだけではなく、疎外感や孤立感も大きいのです。そしてこれに対処するためにも、アイデンティティがどのように形成されていくのかという過程の理解が重要だといわれています。

障害学生が、自分自身をどのように見ているのかということを含めて、その時々的心态をきちつと理解すること、そしてそれに向き合い、支援を求めることが決して恥ずかしいことではないこと、むしろ、十分に整備されていない現状では、積極的に言うべきであることを、彼らに知って貰うための対応の方法や考え方を、周囲の人々が身につけることはとても重要です。

しかし、この領域の研究は多くはありません。確かに、障害者の心理についての研究は、数え切れないほどあります。しかし、高等教育の場において、障害学生の心理的側面を考慮しつつ、支援を含めた彼らとの係わりをどのように展開したら良いのかという研究は、まだまだ緒についたところでは

相互理解

支援を行う人と受ける人、その間を取り持つ人、表には出ないで裏方さんとして支援する人など、たくさんの人々が交錯するこの世界で、「気持ち・気分」、そして「心」というのは、無視できないと私は考えています。

更に、障害学生の中での相互理解の不十分さという問題もあります。健常学生も含め、お互いの特性・特質を理解し、気持ちよく支援を行い、支援を受ける方策を考えることは、今後ますます重要になっていくでしょう。

不調和

もう一つ、最近気に掛かっていることがあります。先日、本学の前学長から電話がかかってきて、「石田さん、こんな研究を見つけたよ。ちよつと気をつけてみてよ」と言われました。書名は『シンク』(ステイヴン・ストロガッツ著、早川書房)。

その中で、盲の生活リズムの話が載っていて、一日二四時間の外界の周期と体内時計との不調和について、「目が見えないということには、問題はないのです——不便なことも確かにありますが、おそろしいのは、外界の周期とおかまいなしに進む睡眠周期の方なのかもしれません」という女性の叙述が紹介されていました。もし、両者の調和がうまくいかないとすると、どうなるのでしょうか。段々、(自分ではそんなつもりはないのに)起きる時間が遅くなっていき、第一時限の授業に遅れるようになる。周りから朝寝坊、朝に弱いなどと言われ、自分でも不思議にも思わないけれど、実は、もつと深い生理的な問題だった。これらの問題は、相手をよく見ていれば理解できるといってもではありません。支援の現場、日々の学生生活の中でどうにかできるものではないのです。きちつと統制された実験や観察の中からわかるものです。そして多くの専門家の検討によって、初めてその対応策が明らかになってきます。この領域の研究が進むことを祈るしか手立てはありません。